

「今年の棚経を終えて」

気象庁の発表によれば、今年の夏は全国的に昨年を上回る記録的な高温で、西日本では統計開始以来最も気温が高くなったそうです。高松は梅雨明け以降、雨が降りませんでしたから、本当に暑い夏でした。本堂のロウソクが熱で曲がるほどで法事も出来ませんし、一斉清掃も来年からは開催時期を見直したいと思います。

棚経も、これまで「棚経は菩提寺の義務」だと思っ一所懸命、お参りしてきましたが、年々気温

は上がる一方、体力は衰えていき

ます。父が還暦の頃は半分以上私が回っていました。私は一人です。現在のやり方で続けていくのには限界があると感じました。また終日棚経に回りますと、葬儀が出来た際、その対応に困ります。そこで来年から、棚経は午前中を中心に回りたいと思います。また「お彼岸でもいい」とか、中には「棚経不要」というお宅もあると思いますので、今後、アンケートでご希望を伺いたいと思います。ご理解の程、宜しく願います。

實相寺 花園會報

令和六年
九月一日発行
発行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園會
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL.087-889-3838
編集発行人
山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第185号

お寺の掲示板

「西田幾多郎博士の求道日記の中に、我心深き底あり喜びも 憂いの波もとどかじと思ふ」という歌のあったことを思い出す。

現実の世界は、喜びあり悲しみあり、愛するものあり憎むものあり、善人あり悪人あり、波瀾万丈複雑怪奇であるが、現実の真つ口中にあって、その波風のとどかぬ心の深さを知るものこそ、知者であろう。」

彼岸にいたる

知者はまれ

多くの人ら

この岸を

えも去らずして

々迷えり

法句經 八五

『法句經 真理のことば』 山田無文老師 春秋社

「業と空」3

インドでは今も昔も「人は死後、四十九日経つと必ず何かに生まれ変わると信じられている」という話は何度もしていますが、そうしたインドでお釈迦様が究極の安らぎとして説かれたのは、「もう二度と生まれ変わらぬ」とことでした。これを「涅槃」といいます。

つまり多くの世界宗教が天国など、死後の世界でこの世の不満や苦しみを解消しようとするのに対し、この世の苦しみをこの世で解決したのがお釈迦様です。

さらに言えば、この世の苦しみをこの世で解決する為に、この世を支配する神様などにお供物を献

げて願いを叶えて貰おうとする民族宗教は多いのですが、お釈迦様は「この世を支配する絶対者などいない。この世は全て縁に因って生滅している」と悟られました。そして「この世の苦しみの原因である、自分自身の煩惱を断たなければ苦しみが解消されない」と説かれたのが仏教です。

こうした仏教の大前提を踏まえ、た上で、再度『正法眼蔵』『三時業』を見直してみましよう。この世での不公平を嘆く闇夜多尊者に対して、鳩摩羅多尊者は一見不公平に見えるが、それは引き継がれる業の努力は無駄ではないと諭します。

道元禅師はこうした逸話を紹介し、「業を軽んじるな」と修行僧に説いた訳です。何故そんな話をしたかと言えば、ここでは詳細を省きますが、宋代の禅書『無門関』に「不昧因果」という話があり、その影響で当時「何事も無心に行じれば因果の報いを受けない」とする禅僧が多かった為でしょう。とはいえ「本来空」というのは禅宗における重要な考え方の一つで、「三時業」でも唐代、長沙禅師の次の問答が紹介されています。

皓月という人が「悟った人は業の障りを受けないが、悟ってない人は前世の債を償わなければならない」と言いますが、獅子尊者や二

祖慧可大師はどうすれば債を償うことが出来ますか？」と長沙禅師に尋ねました。二人とも歴代の祖師ですが、刑死しました。悟った人なのに災難に会うのは何故か？という問いでしょう。

すると長沙禅師は「貴方はまだ本来空を識らないようだ」と答えます。そこで皓月は「本来空とはどういうことですか？」と尋ねたところ、長沙が「業障是れなり」と答えるので、「では業障とは何ですか？」とさらに尋ねたところ、「本来空是れなり」と言われ、皓月が返事に窮すると、長沙自ら一偈を示したという問答です。

(続く)